

石川一成 「李長吉の色彩感覺——『朱』と『緑』とに
表象されるもの——」

中國文化研究會會報第四期第二誌 一九五五年二月
李嘉言 「李賀與晚唐」「詞的起源與唐代政治」「李賀
詩校釋」

上海 古典文學出版社 一九五七年三月刊「古詩初
探」所載

上尾龍介 「苦吟と象徵——李賀の表現手法について
——」「李賀と孟郊——孤高の意識をめぐって——」

九州中國學會報第二卷 一九五六年三月 同第三卷
一九五七年三月

「夜の詩人」

中國文藝座談會ノート第十號 一九五七年六月

未見、未完等の理由でここに取り上げなかつた二三を除
き、中唐の詩人李賀（長吉823～860）に關係のある論文で、
近頃目にふれたのは、以上である。

石川氏は、李賀の詩には「老紅」「小綠」のように形容
詞プラスあか又はみどりの形が頻用されて、一見奇異に感
じられるが、晩唐の溫庭筠（飛卿823？～860？）に同じ用例
があり、李賀獨特の用語とは言えず、従つてかれも全く孤
立した作家ではないとのべているが、中唐の詩人の間にす
でに一般的である用語法を取り上げて、李賀と溫庭筠など
との結びつきを云々しても、大して意味はないであろう。

（荒井「李賀の詩」本誌第三冊参照。）

李嘉言氏は「李賀與晚唐」において、初盛唐にも見られ
ぬことはないが、中唐以後特に顯著となつた（溫庭筠のこと
き、その集の幾卷かはほとんどそればかりであつた。）李賀詩體
を、幻想的で、艷麗な表現、感傷的な内容をもつものと定
義し、實例として杜甫（712～770）から李商隱（813～858）
に至るまで二十あまりの詩句を引用している。（たとへば
「遠き火は熒熒として寒鬼を聚め、綠焰は銷えんと欲して還復起る。
夜は深く風雪 古城空しく、行客の衣襟は汗 水の如し。」劉言史
「いゝるる」夜入簾子古城）その特徴は、人目を驚かせる字
眼と句法、腥・瀉・慘・死・古・冷・狐・仙・龍・蛇・鬼

などの愛用で、これはかれの極度に感じ易い心が刺激、麻酔を欲するのであり、また時代への失望と倦怠の餘の病的現象でもあるとされる。(石川氏の論調も同じ。「怨・恨・愁・老・瘦・衰のごとく人間感情の動搖、不健康な面や生命の枯渴狀態を表す語に對する愛惜。」)

しかし、上にあげられたと同じ作品を、李賀の言語に似て非なる、無病の呻吟の典型だとする論者があり、(上尾氏「苦吟と象徴」)李嘉言氏のいわゆる『李賀詩體』すなわち李賀の詩の性格については、同氏の説く特徴のみで十分に規定し盡されたとは、考えられない。李嘉言氏の關心は、むしろその文學史上の位置づけに傾むいているようだが、作品そのものを精密に讀むことはゆるがせにできないであらう。

「詞的起源與唐代政治」では、詞の起源は南朝の樂府にあるが、中晩唐の交に出現した李賀の詩の怨鬱悽艷こそ、纖濃綺麗なる溫庭筠の詩および詞、ひいては詩餘の文學の直接の源泉となつた、つまりかれの詩は詞を成熟させるための、いわば酵母としての作用をしたのであつて、かくし

て李・溫の二作家には最も密接な親近性ありと、論じられているのである。

既述の通り兩氏はともに、李詩——溫詩、あるいは李詩——溫詩——詞の系譜を考えたが、上尾氏は必ずしも肯定的ではなく、その第一論文には李賀は麗なるも纖に墮せぬのに對し、溫李(庭筠と李商隱)は纖麗だという、明末清初の賀裳の説が引かれている。時代と共に線が細るのは、しかし、唐詩全般の傾向で、たとえば元稹(779~85)と韓偓(844~?)との艷詩について、同じような評語があり(「許彦周詩話」)、しかも同氏の説自體がこのような類型的な對比すら成立させにくいものではないか。氏が「苦吟と象徴」に提示するテーマは、ほかの二つの論文にも繰返しあらわれるので、以下第一論文にもとづいてのべることにする。

上尾氏の第二論文「李賀と孟郊」は、同時代に生き、韓愈を通じて交遊の機會が十分あつたはずの二人の詩人の間に、その形跡が見られないのは、兩者の性格すなわち貴族の孤高と庶民の孤高との差によるもので、前者を絢爛たる詞華を求めて歩いた耽美派的詩人、後者を人間完成の道を歩き續けた人生派的詩人と規定す

る。第三論文「夜の詩人」は、李賀の詩の、光に關する語彙は、大半が夜の光（月光その他）で、かれは夜の闇においてのみ詩情をかき立てる、本質的に夜の詩人であつたというもの。

李賀の特異な愛用語については、石川氏・李嘉言氏もふれているが、上尾氏はさらに詳細に論ずる。かれの詩に多い擬人法を用いた句の、述語の大部分を占める死・老・瘦・皺・泣・咽などの文字は、すべて死につながる滅亡の影を負う。（として「人無く花の色は死す。」など二十例あまりがあげられている。）かれの目には、外界の事物はみな、ほろび行くものの姿としか映ることなく、「社會的に葬り去られた彼の、没落の深い悲哀が、肉體的な滅亡を絶えず豫感させられる時……陰惨な絶望の影を帯び……彼の詩に慘む焦燥の色が生じ……焦燥感の果てには、不吉な死が、ちらついて……李賀は、必然的に、時間への恐れを抱いていた。」氏は李賀の表現の根本動機をかく解している。だがここに說かれるごとくならば、「頽れゆく美しきものに對する咏嘆こそ……繰返しうたわれる主題である。……彼の奇行を傳える一連の物語りの中には、彼の不運な境遇に培かわれ

た絶望的な心情が感じられ……徹底した耽美主義と、そこにつきまとう鋭敏な無常感とは、この絶望的な心情と表裏をなすもの」（村上哲見「溫飛卿の文學」本誌第五冊）といわれる、溫庭筠の詩詞の精神と、どう區別したらよいのか。上尾氏の言う所も、結局さきの兩説と矛盾してはいないのである。

すなわち三氏の解釋では、いずれも詩人李賀の、消極性のみが強調された。かれが必ずしも純粹ではなく、種々の要素をふくんだ人格たること、他のすべてのすぐれた文學者の場合と等しく、上記の一面は否定しないが、その集を通讀する時、溫庭筠の流麗纖濃甘美とは、完全な對照をなすと感じられる作がまた數多く存在する。かれの詩の本色は、實にその「硬性」であつた。ゴッティエは……詩は寶石や精鍊された黄金のごとく、堅くやいばも通さなくてこそ佳作だと言うが……長吉はそのたぐいでもあろうか。（錢鍾書「談藝錄」論長吉用詞賦物條）これと表裏をなすものとして、李賀の、劍に對する好尚があげられる。かれはしばしば劍を歌い、自身を劍にたとえるばかりか、（みずから言う、涙のつるぎとなりま

さに飛び去るべきなるに。「自言漢劍當飛去」王琦注本による。以下同じ。現實の生活においても常に劍をたずさえ、(分れ道にて劍をたたけば銅のうなりを生ず。「臨岐擊劍生銅吼」夜は劍を枕にさえたのである。(憂わしき眠りは劍の小箱を枕とし、旅寢の**とばり**に封侯を夢む。「憂眠枕劍匣客帳夢封侯」かれは單なる文學青年や遊冶郎ではなかつた。「雁門太守行」李集一は、上尾氏がそのテーマの一例證とする詩であるが、夜の闇を歌うから生命を否定した滅亡の意識が漂うと、果して簡単に割切れるだろうか。ここに形象化された息のつまりのような緊迫感、目もくらむばかりの光彩と色彩は、うちに潜む作家の精神の異常な強烈さを豫想させずにはおかないこの鬱積・凝縮せる、はがねのように強靱な生命力とも言うべきもの、これこそ溫の詩になく、李賀の詩のみにある。溫庭筠の全精力は、恐らく新しいジャンル詞の完成という大事業にそそこまれたのである。(村上氏前掲文参照。)

以上の諸論文に共通するのは、第一に、作品のスタイル、作家の精神を、一篇の詩の一部にすぎぬ句、さらにまた句の部分にすぎぬ個々の語彙のみによつてとらえようとして

書 評

いることである。そのような態度のために、各々の詩、詩集全體を通じて流れるものを、完全には把握しにくかつたと考えられる。第二に、李賀を文學史に組み入れることに熱心な點である。これは、もとより何等非難すべきではない。ただ、その詩が後世に至るまでよく讀まれたのは事實だが、それは楚辭などと同じく、中國文學に比較的稀少な要素をふくめばこそであり、かれを學ばんとする實作者たちに對して警告が發せられて來たのは(たとえば元代の作詩教科書「木天禁語」樂府篇法條)注目すべきで、かれの場合はよほど慎重に検討されなければならないであらう。

最後に引用された資料その他について。

(1) 李賀與晚唐 『杜牧(803~852)は(沈)亞之(下賢[81~832])のもとに應じ、李賀詩集に一篇の序を作つた』→杜牧に序文を頼んだのは、沈子明であつて、沈亞之ではない。「果して集賢學士沈公子明の書一通、曰く、吾が亡友李賀……」(樊川文集十・李賀集序)集賢學士沈子明とはすなわち、名高い歌姬張好好を沈傳師(子言[69~835]杜牧はかつてその幕僚であつた。)から買ひ取つて寵愛したと言う、

(樊川文集一・張好好詩。同上二・贈沈學士張歌人)のちの著作郎沈述師である。(繆鉞「杜牧詩選」(一九五七年七月北京)の説も同じ。)なお白樂天(772~846)に「君が簾下に唱歌する人を愛す。色は芙蓉のごとく聲は玉のごとし。」(影宋本長慶集二・醉題沈子明壁)および「沈に謳者あり。善く西出陽關無故人詞を唱う。」(同上三三・晚春欲攜酒尋沈四著作詩自注)の語がある。

(2) 李賀詩校釋「上雲樂」李集四の第六句は通行本に、七・八句は吳正子本に従い、「羸女機中斷煙素 斷煙素縫衣縷」に作るべしとされるが、「續古逸叢書本」影宋刊李長吉文集は、正に李嘉言氏の説と同じ。(本論文は、王琦注本その他によつて疑問の箇所二十三を解いた校記である。)

(3) 苦吟と象徴 (a)『青い陽は鍛んで見え』苦節青陽鐵(李集一・贈陳商)——「春氣もまた之(陳商の苦節)が爲に舒びず。」(姚侔本所載楊妍注)とする解に従うのが妥當であろう。(b)『太陽をのせる龍を殺しても、その運行はとめられぬ。自然は人の力でもうにもならず、しかも世人は不老不死の藥など飲む。』(大意)吾將斬龍足 嚼龍肉 使之朝不得廻 夜不得伏 自然老者不死 少者不哭 何爲服黃金 吞

白玉(李集三・苦畫短)——「龍を殺して太陽の運行をとめ、世界を永遠のま畫にすれば、老者も死なず若者もなげかずにする。仙藥なんかいるものか。」(曾益・姚侔・王琦注による。)と解すべきである。以上第二節 (c)『……南山は次第に暮れて行く』津頭送別唱流水 酒客背寒南山死(李集一・十二月樂詞二月)——この「南山死」の語は議論の分れる所

でおよそ四説(徐渭・董懋策・曾益・陳本禮)がある。ただし曾益以外の注者の意味する所は明らかでないが、曾益の説「山南を陽と曰う。日落つれば則ち陰にして山は死す。」によつて十分理解し得る。すなわち「日没と共に南山を死の靜寂がおおう。」と取ればよく、特に「死」を「暮」だとする必要はない。第三節 (d)李賀は『太常寺協律郎に過ぎなかつた。』——たしかに、新舊唐書ともにかれは協律郎になつたと記すが、これは奉禮郎のあやまりで、清の王鳴盛がすでに指摘し「十七史商榷」八十九 朱自清「李賀年譜」元和十一年條に考證がある。李嘉言氏にも或いは誤解があるのではなからうか。「兩唐書とも李賀は協律郎の役目になつた」と言うが、果してしかりとすれば(「詞的起源與唐代政治」)(e)

『李賀の官途への道は、元稹の手によつて、完全にふさがれ……』——晩唐に編された隨筆集の劇談録にもとづく説で、同じく李賀年譜元和五年條に、その謬説たることを證してある。以上第二節

(4) 李賀と孟郊第二節 姚合(775~855?)の詩「諸公と同じく太府韓卿の宅に會す」姚少監集八に見える韓卿は、韓愈のこととされているが、韓愈に太府卿の履歴はない。

(5) 夜の詩人 李賀に關する記事を録する各代の詩話四十一種のなかで、かれの特定の詩句についての批評が四條にすぎないというのは、甚だ疑問で、いま宋代の詩話だけによつても、優に十條を越える評語を得た。

(京都大學 荒井 健)

歐小牧 「愛國詩人陸游」

上海 古典文學出版社 一九五七年 四月 九六頁

南宋の詩人陸游(放翁1125~1210)に關する研究は、にわかに盛んになつたように見える。われわれは今年に入つて、

書 評

歐氏の著書のほか、游國恩・李易兩氏選注の「陸游詩選」(北京)を手にしたのみならず、程千帆氏の「陸游及其創作」を雜誌「文學研究」第一號(一九五七年、北京)でよみ、さらに錢鍾書氏の「宋代詩人短論——十篇」(同上)をも讀むことができた。歐氏の書物を紹介するにさきたち、これらの著書や論文に共通の傾向につき述べたい。

陸游の詩には二つの側面がある、錢鍾書氏のことばを借りれば、その一面は『悲憤激昂』であり、他の一面は『閑適細膩』である。陸游は南宋の時代に成長し、異民族に占據されていた中國の北半分の失地を回復せよと叫ぶ主戰論者としての政治的立場を終生保持した。その熱烈な叫び聲はかれの詩の大きな特色をなしている。かれが清末以來『愛國詩人』とよばれたのは、このためである。しかし他面、かれの詩には日常の瑣事をたくみに織りこんだ、極めて美しい風物の描寫も存在することは見のがせない。錢氏は言う、近ごろまで中國のたいていの舊家の客間や書齋にかかげてあつた「對聯」の軸物は、陸游の詩から取つた對句を書いたものが多かつたと。かれの對句が、士大夫の家